

れねばならない。

かくて優生運動は、優秀者の減少を防ぎ得るのであるが、彼等に無限の進歩を遂げしめるには十分なものでない。いくら優良な系統であつても或る一定の水準以上に優れたものは出て来ないものである。そして一方には、競馬用の馬の場合と同じやうに、人間でも時々、意外な血統から例外的な優秀者が出ることがある。吾々はまだ、天才がどんな風にして生ずるかを全然知つてゐないし、何うしたなら生殖細胞の核質の中へ漸進的な發達を起させ得るか、何うすれば、適當の「突然變異」によつて、優秀者の産出を來たさしめ得るかを知つてゐない。そこで吾々は、教育や、特別な經濟的補助と云ふやうな間接の方法を通じて、民族の優良な男女が自由に容易に結婚し得るやうにするだけで満足すべきである。優者・强者として生れついた者の進歩發展は、その發育の條件や、両親が自分の生存中に得た良質を何の程度に傳へ得るかと云ふ事に係はつてゐる。それ故、現代の社會は須らく、總ての者、殊に優秀者が、一つの安固な生活を有ち、家庭といふ一つの小さい世界を作り自分の住宅を有ち庭園を有ち、親しい友人を有ち得るやうにしてやるべきである。そして、子供等は両親によつて育てられ、彼等の精神を反映してゐるもの、中で成長せねばならない。子供の相手としてのグループは人數の可成り少いものであるべく、家庭は十分永續するものであり、家族同士の間柄がしつくりと引き締つてゐて、両親の人格がい

つもそこに感じ取られるやうになつてゐるべきである。今日では、小作人や職人や美術家や教師や學者が經濟上の行詰りから、一轉して手か頭を唯一の稼ぎ道具にする無産者に零落するためしが續々と出て來るが、こんな轉落を防止することは絶對的な緊急事で、かやうな無産階層の存在は科學的文明にとつては此の上ない汚辱と云ふべきで、之を放任しておくなら、社會單位としての家庭が破壊されて行き、延いて理智と道徳心との絶滅を來たし、まだしも残つてゐる文化と美との殘遺物を絶やし、人類それ自身を低下させることになる。個人と家庭が最もよく發達し得るためには、一種の安定が絶對に必要である。結婚生活が一時的の同棲であるといふ惡風を絶滅すべき必要はあまりにも明白である。男女の結合は、高等類人猿の間に見られる如く、少くとも子供等が親の庇護を要しなくなる頃まで存続しなければならぬ。教育、殊に女子教育と、結婚と離婚とに關する法律は、次代の利福を計るものとして改變されねばならない。女子が高等の教育を受くべき理由は、博士や辯護士や教師になるためでなく、自分の子供等を優良な性質を有つた人間に仕上げ得るやうになるためである。

自發的の優生運動は、一層強い優れた個人を生ぜしめることだけでなく、抵抗力と聰明と勇氣を遺傳するやうな家族を作り出すであらう。かくの如き家族は一種の貴族主義を形成するもので、その中からは優秀な人物が生れるであらう。現代の社會は須らく、凡ゆる

手段を盡して人類の改善を計るべく、賢明な結婚をすることによつて天才的な子供を産み得るやうな人々に對しては如何なる經濟的乃至社會的利便を與へてもよく、どんな高い名譽的待遇を與へても與へ過ぎにはならない。吾々の文明は複雑を極めて居り、何人もその多種多様な機構を究めつくしてゐない。併しそれにも拘らず、此等の内部構造は、知悉され、操縦されねばならない。この仕事を完成するには、尋常以上の知能的乃至道德的器量を有つた人物を造り上げねばならない。優生運動によつて生理的・遺傳學的貴族主義を建設することこそは、現在の大きな諸問題を解決する上での重要な階程となるに違ひなからう。

八

個人の形成に働く物理乃至化學的要因

人間に關する吾々の知識はまだ不完全であるが、それだけの知識によつても、その身體と精神との形成に干渉し、その凡ゆる潜在力を發達せしめる上に援助を與へ得るのである。つまり、吾々の欲望が自然の法則を離れてゐない限り、この欲望通りに人間を鑄出することが出来るので、吾々は三つの違つた方法を適用し得る。その第一は、身體に、組織と體液と腺の構造と精神活動を變化せしむるやうな化學的物質を送りこむことである。第二は、外側の環境へ適切な變化を與へることによつて、心身の凡ゆる活動を調整する機能——即ち適應の機能を十分に働かせることである。第三は、身體の發達に好影響を與へ個人に自分で自分を養成して行くだけの氣力を與へるやうな精神状態を起す事である。此等の方法は、物理的・化學的・生理學的・心理學的性質を有する手段を利用するが、此等の手段の取扱ひは困難で正確を期し難く、吾々はまだ不完全にしかその使用法を知つてゐない。只、此等の及ぼす影響は身體の一部分に限られてゐず、總ての系統に行きわたるのである。又、その働き方は、少年時代と青年時代に於てさへ緩漫に働く。しかし、それらは常に人間に深い決定的な効果を刻みつける。

外部環境から來る化學的乃至物理的動因は、周知の如く、組織と精神に、著しい變化を與へ得るものである。人間を抵抗力の強い剛膽な人物にするには、山地の永い冬、焼けるやうな炎暑と萬物が氷りつくやうな酷寒とのこもくやつて來る國、冷たい霧と乏しい日光とを特色にし、暴風で叩きつけられ、土地が貧寒で岩澤山であるやうな地方を利用すべきである。かやうな土地においてこそ、剛健で熱情的な優秀者を養成するための學校を建つべきである。太陽がいつも照り輝き、氣温が暖かく一定的であるやうな南の國々は不向である。伊太利のリヴィエラ海岸地方とか米國のフロリダ州などは、變質者や病人や老人や、又は一寸の間休養を執らうとする尋常人のみの行く處である。暑さ寒さと、乾燥と濕潤と、灼熱の太陽と雨雪と、風と霧との交代に、一言で云ふなら北歐地方では普通であ

るやうな氣象の暴虐にさらされてゐる人間では、精神上的の氣力と神経の平衡と肉體の抵抗力が増大するのである。西班牙のやうな酷暑もあればスカンディナヴィアのやうな嚴冬もあると云ふ北アメリカの酷烈な氣候こそは、嘗てのヤンキーが傳説的な體力と剛勇とを有ち得た原因の一つであつたと思へる。しかし此等の動因も、人間が家の中を快適にし、家居生活と座業生活をするやうになつてからはすつかりその鍛鍊的な効力を失つたのである。

吾々は現在のところ、食物の中に含まれてゐる化學的物質が心身の働きに及ぼす影響についてよりよく知つてゐない。この問題に關する醫學者の説はいくらも價値のないものでそれは彼等がまだ十分長期に亘つて人間實驗を試み、一定の食物攝取から來る影響を確かめてみたことがないからである。たゞ知られてゐるのは、過去に於て、その智慧と慍悍さと豪勇とを以て覇を成したヨーロッパ人種の强者等が、主に獸肉と粗搗の麥粉と酒類とを攝つてゐたことで、かういふ主食物の影響を精しく知るためには、新しい實驗を重ねることが必要である。しかし、食物の攝り方と、その分量と成分とによつて、身體へも精神へも特殊な影響があらはれると考へられるので、創造し進出し指導する運命を擔つてゐる者には、手工業者の食物は適しないと云つてよからう。又、かう云ふ人々には、靜穩な修道院の中に住んで、自分だけは時代の熱情を揉み消してしまはうとして瞑想三昧を事とし

てゐる修道僧達の食物も不適當であらう。しかし、差し當つて吾々は、事務所や工場の中で機械的に生きて行く現代人に適した食物を發見すべきであるが、恐らく、彼等が飼育動物のやうな缺陷を起さないやうにするためには、何よりも、あの椅子や腰掛に坐つたまゝでゐる時間を減らすことが必要であらう。勿論彼等へ、自然物と動物と同じ人間とを相手の不斷の戦ひで一生を送つてゐた吾々の祖先達と同様の食物を宛てがふわけには行かぬがしかし各種のビタミンや果物を攝らせたところで健康を改善することは覺束ない。此等の物質は、なにも特別にとらなくとも、牛乳やバターや穀物や野菜の中に十分含まつてゐるのであるが、それ等を喰べてゐる一般の人民は何うかと見ると、今まで、まだ別に大した健康状態なり精神上の優良さを示してはゐないのである。實驗室で理論上申分のない食物で飼はれた動物にしても同様である。むしろ吾々は、體を太らせたり重くするのでなしに筋肉をしなやかで強くし、神経の抵抗力を高め、精神の働きを敏活にするやうな物質を要するのである。恐らく何時か、どの學者かによつて、丁度蜜蜂が、特別に調へた食物を與へるだけで一匹の普通の幼蟲を女王蜂に變化させるやうに、普通の子供をでも偉大な人間に仕立てるやうな手段を發見するかもしれない。併し又、何等かの物理的又は化學的要因が、單にそれだけで個人を大して進歩させることはなさうである。心身の優越は、種々の遺傳と發達の諸條件の協同に負ふものである。而して發達の過程に於て、化學的要因は心

理學的・機能的要因と切り離さるべきではないのである。

九

生理的要因

總ての生理的組織の適應性の發揮は、個人の發達に著しい好影響を與へる。總ての機能と云ふものは働かせれば働かせる程、構造が磨り耗らずに、一層抵抗力のある強靱なものになるのである。又生理的・心理的活動を刺戟することは各組織や精神を改良する最も確實な方法である。それには、諸々の機能を一樣に動員して、秩序ある運動を起させ、一定の方向に導くことによつて、容易にさうした効果を收めることが出来る。例へば、よく知られてゐるやうに、一々の筋肉群は、適當の運動によつて一齊に發達させ得るもので、筋肉だけでなしに、筋肉に榮養を補給する機關と、全身をして長時間の努力に堪へしめる機關とを併せて強化しようと欲するなら、典型的スポーツよりもつと變化のある運動が必要で、吾々の祖先が原始生活の毎日の必要からやつてゐたやうなのが、この意味での運動である。大學で教へられてゐるやうな専門化せられた體育では、眞に抵抗力のある人間を鍛へ出すわけに行かない。筋肉、血管、心臓、肺、腦髓、骨髄等を含む諸系統、つまり生體の全部を活動させることが必要で、凸凹のはげしい地面を駆けまはつたり、山坂を登つたり、角力をとつたり泳ぎをしたり、森の中や田畑で働いたりし、同時に風雨寒暑の咎に

さらされ、或る種の嚴酷な生活方法を守つてゐると、筋肉と骨格と凡ゆる器官と精神とが美しく調和的に發達するものである。

又、吾々は身體をこんな風に持ちこなすことによつて、外界の變化へ堪へしめるための重要な諸器官を鍛へることが出来る。木登りや崖登りのやうな自然的の行ひは、血清の成分と血行と呼吸とを調整する總ての系統に活動を促すことになるし、高山などに滞在してゐると、赤血球の製造に當つてゐる諸器官を盛んに活動させることになる。又長い距離を走りつゞけてゐると、筋肉の間に出て血液の中へ流れこんでゐた多量の酸を排除するのに役立つやうな諸現象が出て来る。渇きが組織の水分を干してしまふなどはその一つである。又、絶食をすると、諸器官の蛋白質と脂肪物質とが徵發されるし、暑い所から寒い所へ、寒さから暑さへ出入りするものは、體温の調節をする廣汎な機能に活潑な働きをさせることになる。その他、適應作用を促進するやうな方法は澤山ある。此等を十分に働かせることが身體全部を完成さすことになり、之によつて身體の調和を計る諸機關が一層強く、一層しなやかに、一層よく機能を營み得るやうになる。

身體と精神の諸機能が全一的に調和してゐることは、個人の有し得る最も重要な特性である。それを得るための方法・手段は、各個人の特種な性能にしたがつて異なるのであるが、どの場合にも精神の努力を要する。吾々が諸機能の平衡を保つて行くのは、結局自分

の理智を働かせ、克己的な生き方をするに依つてである。一々の人間は自分の生理的欲望と酒で酔を買ふとかスピードを速めるとか、周囲の不斷の變化を欲すると云ふやうな人爲的の欲求を満足させようとする天性的な傾向を有つてゐるのであるが、この傾向を悉く満足させるのは自分を退化させることになる。それ故、飢を抑へつけ、眠いのを我慢し性慾や懶け心に打ち勝ち、運動や飲酒等の嗜慾をも抑制するやうな習慣をつけねばならぬ。睡眠と食事が多過ぎるのは少すぎるよりも一層有害である。個人を訓練して、強い平衡のとれた活動をする人物に仕立てるには、先づ調教のやうな仕込みを與へ、この仕込みが身につけてからは、段々にそれへ理智の助力が加へられるやうに仕向けることが必要である。

各自の個人的價値は、外側のいろ／＼な状態に對して、別に努力をせずとも早速に對抗し得る能力如何による。そしてかやうな程度に達するには多くの反射作用と、非常に多種多様な本能的反應とを作り出すことによつて得られる。反射作用は、個人が若いほど容易に作れるものである。子供は、自分の中へ有益な澤山の反射作用を蓄めこむことが出来る。實際子供は、牧犬のうちの最も伶俐なものよりか一層容易に調教し訓練され得るのである。吾々は彼等を仕込み鍛へて、平氣で走り續けたり、猫のやうに飛びおたり、攀ち登つたり泳いだり、調和的なゆとりを以て立ち止つたり、歩いたりし、周囲の出來事を正確に觀察し、眠氣を残さずに早く眼を覺し、いくつもの國語を話し、服従し攻撃し防禦し、澤山のいろんな仕事を手先で巧みにやつてのけるとか、總てのさう云ふ事をなし得るやうにすることが出来る。道徳的習慣も同じ具合に作り出せるものである。犬の如きでさへ盗みをしないうやうに教へられる。總じて、誠實や公明や勇氣は、反射作用を作り出すことに用ひられた方法によつて、即ち、推理や論辯や説明なしに發達せしめらるべきもので一言で言ふなら子供は仕込まるべきものである。

この^{コンプレクシオンズマン}仕込みと云ふのは、バツロフのつくつた専門語で、つまりは、幾多の聯合反射作用を作り出すことである。昔から動物の調教に用ひられた方法を科學的・現代的な形で適用することである。これ等の反射作用が出來上つてゐると、そこには又、當人にとつて不快な事と好ましい事との間に一つの直接な關係が成立つのである。一匹の犬にとつて、鐘の音や銃聲や、又は鞭の響きが、好きな喰べ物の同義語（同種の感じを起させるもの）になり得るやうに、人間の場合でも同様である。未知の國へ遠征に出かけた時、食物や睡眠の缺乏を苦しめないやうなものである。肉體上の苦しみは、それが連續的な努力と結びつき、成功を伴ふものである以上容易に堪へられる。死ぬことさへも、それが一つの大きな冒險と結びつき、美しい犠牲としての意義を有つか、又は神の懷へ歸る時の靈の大悟と結びついてゐる場合には微笑を以て迎へられるのである。

心理的要因

心理的要素は已に誰もが知つてゐる如く、個人の發達に一つの著大な影響を及ぼすものである。それは身體と精神とに決定的な形質を與へる上に寄與する所が非常に多い。先に述べておいた如く適當な反射作用を作り出すことによつて、子供は容易に自分を或る種の外側の事情に適應し得るやうになるもので、澤山の反射作用を習得してゐる者は、いろいろな狀態に手際よく適應して行く。例へば、敵に攻撃されると、忽ち應戰することが出来る。併し此等の反射作用は、豫想外の、又は豫想され得ない性質の新狀態には即應させるものでない。それ等の凡ゆる事態へ巧みに自分を適應させる全勝的な性能は、神經や器官の諸系統や精神やの或る種の性質に係はつてゐる。此等の特性は或る種の心理的要素に影響されて發達するものである。例へば吾々の知つてゐる如く、知能と道德感との訓練は、交感神經によりよき平衡を得せしめ、諸器官と精神の活動により良き調和を得せしめるのである。此等の要素には、外來性のものと内存性のものとの二種類があつて、前者に屬するのは、他の人や、常人の社會環境によつて要求される總ての精神の反射作用と狀態である。生活が安定してゐるか否か、貧乏であるか富裕であるか、努力し力爭するか、懶惰で

あるか、責任を重んずるか等と云ふ事がそれに相當した心的態様を作り上げる。第二の種類の類に屬してゐるのは、注意力や思考力や征服の意志や禁慾やの如く常人自身に依屬してゐる内心狀態である。

しかし、これ等の心的要因を個人の養成上に使ふことは、非常に手加減が難しいものである。しかし、子供の知能形成を導くことは容易に出来る。適當な教師と書物とは、子供の内なる世界へ、その身體と精神の發達に影響を與へるやうな觀念を植ゑこむのである。吾々は已に、道德心、美意識、宗教心と云ふやうな心的活動の發育が知能教育から獨立したものであることを見ておいた。此等の活動へ影響を及ぼすことの出来る心理的要素は社會的環境に屬してゐるのだから、常人を適當な環境に置くことが必要である。そこで常人を或る種の心理的外境で包圍することが必要になつて来る。尤も今日では、子供に不如意と缺乏と、争鬭と、刻薄な生活と眞の理智的修養等から来る利益を得さすのは非常に困難である。内面生活の發達から来るものにしても同様である。内面生活と云ふ私的な、隠された、他人と分け合ふことの出来ない、非民衆主義的なものは、多くの保守主義的教育家からは罪とさへ見られてゐるものである。しかし、之こそは凡ゆる獨創性の源泉であり、凡ゆる偉大な行動の出發點である。之のみが個人をして、群衆の眞只中で自己の人格を保持させ、現代都市の亂脈と騷擾の中で、精神の自由と神經系統の平衡とを確保させるので

ある。

今言つたやうな心的要素は、個人毎に違つた働き方をする。それ故此等は、各個人の心身上の固有性を十分に知りぬいた者達によつてのみ適用さるべきである。各々の人間は、弱いか強いか、感情家であるか鷹揚であるか、利己的であるか理智的であるか愚鈍であるか、鈍感であるか敏捷であるか等々にしたがつて、同一の心的刺激にも違つた具合に應答する。それ故、此等の非常に手心を要する方法は、個人の形成を計る上に於て、盲目的に適用してはならないものである。併し又、一方には、一つのグループの人々や、同一國民に屬する總ての個人に一樣に働きかける經濟的乃至社會的事情がある。それ故、社會學者も經濟學者も、生活條件を、その變化から來る心理上の影響を考慮することなしに變更させてはならないのである。極度の貧困も、何不足のない榮耀も、平和や、群衆に巻きこまれてゐることや、孤獨になつてゐること等は、何れも人間の進歩にとつて好都合のものでない。多分人間にとつては、經濟上の安定、閑暇と、缺乏と力争との或る種の混合によつて作り出された精神的環境がその最上の發育に必要である。又、生存の條件の影響は、民族と個人とでそれ／＼違ふ。或る人々を壓しつゝすやうな出來事も、他の人々には反抗と勝利へ導くものとなる。經濟的・社會的環境は人間に合はせて作らねばならない。人間をそれに準はせてはならない。吾々は身體の諸系統へその全部的な活動を助け保つに適した

やうな心理的環境を與ふべきである。

言ふまでもなく、心理的動因の効果は成人に於てよりも、子供と青年に於てずつと著しい。それ故、此等を適用するには、青少年期といふ、生涯の可塑的な時期に於てすべきである。併し段々に弱まることは云つても、その影響は全生涯に亘つて現はれ存するのである。肉體が成熟しきり時間の値が減じて行く頃には、むしろその重要性が増すのであつて、殊にその効果は、老いて行く身體にとつて非常に有益である。すなはち、精神と身體とを活動状態に於て保つことは、老衰の到來を遅延させることになる。熟成期と老年期との間にこそ、人間は青年期以上に嚴格な一つの紀律を要するもので、早期の體力衰壞は、自分を放棄したことから來てゐる場合が多い。吾々の形成を助けたのと同じ要素は、吾々の衰退を遅延させることも出来る。これ等の心理的動因を賢く使役することは、身體の組織と、知能および道念の寶庫が老衰といふ深淵の中へ崩れ落ちる時期を遠ざけるのである。

一一

健康

健康には、周知の如く、自然的な健康と人工的な健康と二種ある。吾々が欲し求めるのは、傳染病や、退行性の病氣に對する組織の抵抗力と、神經系統の平衡から來る自然の健

康で、特定の食養生や、ワクチンや血清や、ホルモンやビタミンや、定期の體格検査や、醫者・病院・看護婦の高價な保護にたよつた人工の健康ではない。人間はこんなものを要しないやうに造らるべきである。醫學にしても、吾々が病氣や疲労や恐怖を知らずに居れるやうな方法を發見してこそ、最大の捷利を得たことになるだらう。吾々は人類に、心身の完全な活動から来る自由と喜びとを與へなくてはならない。

しかし、健康のかくした觀念は甚だしい反對を受けるであらう。かやうな健康觀は在來の思想を掻き亂すからである。近代醫學は人工的健康を作り出すこと、一種の生理統制の方へと向つてゐるその理想は、純粹化學物質を使つて組織と器官とへ干涉し、不十分な機能活動を促進したり補償したりし、感染への抵抗力を高め、病原物に對する器官と體液の對應作用を増進させること等々である。つまり吾々はまだ、人間の體を粗漏に造られた機械と見、その部分々々は絶えず補強をしたり修繕しなければならぬものと考へてゐる。ヘンリ・デールが最近の演説で、過去四十年間に於ける治療學の勝利を稱揚し、抗毒血清やワクチンやホルモンやインシュリンやアドレナリンやチロキシン等や、砒素の有機化合物や、ビタミンや、性的機能を調節する物質や、苦痛の緩和なり、不全機能の促進を目的に化學製法で得られた多種類の新藥品を擧げてその發見を讚嘆し、此等の新製品を造るためにどれらい工業實驗所が續々建設されつゝあることを自慢したのは尤ものことである。

化學と生理學の方面に於ける此等の進歩が非豈な重要性を有し、吾々に段々と身體の隠れた機構を發き出して見せ、醫學を促して一つの確實な途を進ませるのは明かである。併しながら、此等は果して、今からもう、人類の健康獲得の大勝利と見らるべきものであらうか？ そのさうでない事は斷るまでもないからである。生理學は經濟學と同列に置かるべきものでない。社會的・經濟的現象に比べると器官と體液と精神の活動は無限に複雑である。統制經濟は成功することもあり得よう。しかし、統制生理の成功は實現しきうもないのである。

現代人にとつては人爲的な健康は幾らのたしにもならないものである。醫者に診て貰つたり療治してもらふのは面倒で煩はしく、又大概はさしたる效驗もない。病院に入つて手當をしてもらふとなると費用が大變で、その效果も期待するほどには行かない。今日では、見たところ健康さうな男も女も、しよつちゆうどこか知ら小修繕を要してゐる。つまり彼等は、人間としての役割を立派に果し行くほどの健康と體力を有つてゐないのである。健康とは、病氣でないと云ふ事よりもずっと大きなことである。一般人が段々と醫術へ信頼をおかなくなりつゝあるのも、或る點までかうした健康觀の表現であると云へよう。人間の眞の性狀を考慮に入れない限り、人間にその欲するやうな健康を得させることは不可能である。吾々の已に確かめてゐる如く、器官と體液と精神とは一つの全體をつくつてゐる

ので、此等は皆、遺傳性の傾向と、發育の事情と、環境の化學的・物理的・生理的要因とから來た總結果である。又、健康が、身體の各部分の化學的・組織的構造と、身體全部の特質に係はつてゐることも吾々に知れてゐる。そこで吾々は、個々の器官の機能の活動に干涉するのになしに、この身體全部を助けてその全一性を維持させるやうにすべきである。自然的の健康は眼のあたり觀察される事實であつて、それを有つてゐる人々は、傳染病にも、退行性疾患にも老年期の衰弱にも抵抗する。この抵抗の由つて生ずる祕密を發見しなくてはならないのである。自然の健康を獲得することが如何に人間の幸福を増すことかは全く計りがたい。

衛生學が傳染病と悪疫大流行に對する戦ひにすばらしい成功を收めたことは、生物學的探究をして幾らか、バクテリアやウイルスから離れさせ、生理的乃至心理的方面へ轉せしめるよすがとなつた。醫學は今や、器質的諸疾患をごまかすことに満足する代りに、それを豫防し治癒させることに努力すべきである。例へば、患者にインシュリンを與へて糖尿病の症候を消失させるのでは十分でない。インシュリンは糖尿病を癒やすものではない。この病氣はその原因と活動力の弱つた膵臓細胞を新生させるか、或はそれを取りかへる方法を發見される事によつてのみ征服されるのである。病人に特殊の化學的物質が缺けてゐると云つて、それを與へるだけでは眞の健康を得させることにならない。必要なのは、器

官自らが體內でさうした化學的物質を造り出すやうにすることである。一體又、腺の榮養に關する知識は、その分泌物に關する知識よりも遙かに得難いもので、吾々は今まで樂な途だけを歩んできたのである。吾々は今こそ、未知の領域にある吾々自身の最も奥深い處へ乗り込むべきである。醫學の進歩は、一層大きく一層設備の整つた病院や、一層大きな最新式の藥品工場を建てることから來るのでなく、適當な想像力を具へた學者が現はれ、實驗室の静寂の中で沈思熟考し、且つ實驗し、遂に、化學的構造といふ舞臺や、生體や精神の祕奥の幕を引き開けることにのみ係はつてゐる。約言すると、自然の健康と云ふものを獲得するには、身體と心靈に關する吾々の知識が現在よりもずつと深くなることを要するのである。

一一

人格の發達

吾々は、現代生活によつて弱められ、鑄型にはめられてゐる人間に、彼等の人格を回復させなければならぬ。男女の兩性はもう一度はつきりと限定され、人間は明確に、或は男、或は女にならなければならぬ。そして各個人は決して、その異性の性的傾向や心的特性や野心を現はしてはならない。次いで又彼等は、男性或は女性に固有の、特殊な豊富

さと多様相を有つた活動に於て自らを發達さすべきである。人間は機械によつて大量に生産されるものではない。彼等の人格を再建するためには、學校だの工場だの事務室などと云ふ既成概念の枠を破り、工業文明の原則そのものをさへ廢棄しなければならない。

而も、かやうな革命は決して實現性のないものではない。教育の革新は、多くの學校へ變更を與へることなしに遂行され得るのである。しかし又、吾々が學校と云ふものに與へてゐた價値は再評價されねばならない。吾々は人間が個性を持つてゐるから集團的に教育されるべきものでないといふ事を知つてゐる。學校は兩親によつて與へられる個人的教育の代りになり得るものでない。小學教師のうちには、兩親の知的役割を相當によく果してゐるのが多い。併し子供の道徳的・美的・宗教的活動を發達させることが缺く可からざる事なのである。兩親は子供の教育に於てはのがれる事の出來ない任務を持つてゐる。彼等は此の務めのために準備されてゐるべきである。一體又、若い娘達は、時間の大部分を子供の生理と心理と教育方法との學修にあつべきものであるのに、それがなされないでゐるのは、如何にも訝しいことではないか！ 婦人はその自然の職務に立ち歸るべきで、この天職は、子供を産むことだけでなく、養育し教育することに在る。

學校と同じに、工場も事務所も改革の手を免れ得るものでない。嘗ては、識人が自分の家と仕事を有ち、自宅で自分の氣の向いたときに自分の好きな様に仕事をし、自分の智

慧と工夫を凝らし初めから仕上げまでを自分だけでやり、創作の樂みを味はひ得るやうな工業形態があつた。今日は職工等にこの利福を回復さすべき時である。幸ひ電力と近代機械の供給が行き渡つてゐるから、小工業も所謂工場から獨立することが出来る。又大工業にしても、やはりもつと分散的になり得るものと思はれる。或は又、丁度一定年限の兵役が課せられるやうに、總ての若い國民達を短期間大工場で働かせることにしたら何うであらうか？ さうすれば無産階級なるものを消滅させることにもなるであらう。總じて人間は、果てしない大群衆を作つてゐるのでなしに、小さいグループの中で生きるやうになるのが本當で、さうしてこそ、各自がそこで自分自身の人間的價値を保有して行くことが出来る。又、彼等は機械の齒車であることを止めて、各自が一つの個人になるべきものである。今日では、無産者の生活位置が封建時代の農奴のそれと同じに、低くなつて居る。農奴と同様に、現状から脱出し、獨立し、他を支配する者にならうと云ふ希望は全然持ち得なくなつてゐる。しかし、これに反し或る種の職人は、いつか親方になれると云ふ正當な希望をもつてゐる。自分の耕地を有つてゐる農夫や、自分の小舟を有つてゐる漁夫は働きは辛くとも、誰にも頭をおさへられてゐず、自由に時間を使ふことが出来る。工業労働者の大多數にも類似の獨立と尊嚴とを有たせることが出来る筈である。又、大會社のだゞつひろい事務室の中、町ほどに廣々とした大商店の中でも、雇員は工場の労働者と同じや

うに自分の人格を失はされる。實際、彼等は無産者になつてゐるのである。何うも、近代の商工業組織と大量生産主義とは、人間の人格的發達と兩立しないものやうである。果してさうであるとしたなら、犠牲にさるべきは近代文明であるべく、人間であつてはならない。

又、社會が人間の人格を認め得たなら、その不平等をも容認すべきはずである。人間はそれぞれの特有な性能にしたがつて利用さるべきものである。然るに吾々は、人間の間に平等を打立てようとして、利用價値の非常に多い個人的特有性と云ふものを禁壓したのである。各個人の幸福は、自分を自分の受持つてゐる種類の仕事へびつたりと適應させることに係はつてゐるので、實際又、現代の國家の中にもいろ／＼違つた仕事は澤山にある。そこで、人間の型を統一させるのでなしに多様化し、教育と生活習慣によつて此等の相違を一層著しくすることこそ必要である。その反對に現代の工業文明は、總ての人間に必然に具はつてゐる差別を認めることなしに、彼等を大ざつばに富者と無産者と農民と中産階級との四階級に壓縮したのである。各種の雇員、學校教師、警官、牧師、町醫、學者、大學教授、小商人などが中産階級の部類で、大凡同じやうな生活の爲方をしてゐる。彼等は、元來非常に懸け違つた型の人間であるが、かうして、その人格によつてでなく、収入程度にしたがつて一緒にされてゐる。しかし、この寄せ集め階級の中に何等眞の共通點が

ないのは明白な事實である。何れにしても彼等の生存は非常に狭苦しいものとなつてゐるから、その中では大きな人物になり得る者が、自分の精神的潜在能力を發達させようとしても、結局窒息してしまふのである。社會の進歩を促し助けるためには、建築師を動員し鋼鐵や煉瓦を買ひこんで學校や大學や實驗所や圖書館や教會を建てるだけでは駄目で、精神的な方面へ身をさゝげる人々のために、その特有性能と精神的理想とにしたがつて各自の人格を發達させるやうな便宜を與へてやる必要がある。中世紀に各種の教團が、苦行と神祕主義と哲學的思索とに適した生活様式を創り出した様なものである。

又、今日の文明は、その粗暴な物質萬能主義から、理智の飛躍を抑壓するのみでなく、感情のこまかな者、氣心のやさしい者、弱氣の者、獨りぼつちになつてゐる者、美を愛する人々、生存の中で金錢以外のものを求めてゐる人々、現代生活の荒々しさに堪へないほご性狀の繊細に出來てゐる人々を壓し潰してゐる。昔は、かゝる、あまりにかよわい、或はあまりに不完全な人々でも自由に各自の人格を發達させて行く事が出來た。或は世間から離れて一緒に共同生活をしたり、或は修道院や病院又は瞑想的な集團にはいつて貧困と勞働と同時に威嚴と美と平和を見出したのである。そこで現代でも、この型の人々に對しては、工業文明の敵意ある條件のかはりに彼等に適したやうな環境を與へることが必要であらう。

それから、吾々の前には尙、精神的不具者や非常な数の犯罪者に關する問題が未解決のままになつてゐる。彼等のために、健全な國民は大した負擔をもたされてゐる。刑務所や癲狂院の經費、民衆を強盜と狂人とかから守護するための費用は莫大なものになつてゐる。實際、文明諸國では、此等の無益有害な者共を生かしておくために頗る幼稚な方法が執られてゐる。こんな不正常の人間共は正常な者の發達を阻害する。それ故、この問題はもつとよくその正體を直視すべきである。社會はもつと經濟的な方法で犯罪人と狂者とを處分すべきでなからうか？ 社會は自らがよく、責任のあるなしを識別し、眞に責任のある犯罪人を處罰し、精神上無罪である犯罪人は免してやるだけの判斷をなし得ると揚言して來たが、それはもう止めてもらひたいものである。社會にそんな、人間を識別し判斷する力がないはしないのである。むしろ社會は、自らにとつて危険な分子を容赦せず、それに對して自らを防護すべきである。すると何うしたらよいのか？ 固より、刑務所を一層宏壯にし、一層居心地のいゝやうにすることに依つてではない。それは丁度健康が、一層大きく一層科學的な病院を建てることで改善されないのと同様である。精神錯亂と犯罪とを消滅させることは、人間についての一層十分な知識、優生運動、教育と社會状態とに根本的な改革を加へることによつてのみ得られる。刑務所の如きは恐らく廢止すべきものであらう。そのかほりに、もつと小さい、そしてもつと費用のかゝらない設備を以てすべきであらう。

犯罪人のうちでもさほど危険でないのは、笞刑か、又はもつと科學的な方法で懲罰し、次いで救濟院のやうな處へ短時日の間收容して矯正を計るべく、それで十分社會の秩序を保つて行けるだらうと考へられる。それから、殺人犯とか武装強盜とか、子供を誘拐したとか、貧乏人の物をしぼりとつたとか、重大な背任罪を犯した者共に對しては、適當なガスを用ひてらくに死なせるやうな死刑執行所を設くべきで、さうすれば人道的・經濟的に彼等を處分してしまふことが出來よう。狂人で犯罪人になつた者等に對しても、やはりこの處分方法を適用すべきであると思はれる。何れにしても、現代の社會は、健全な個人を本位にして躊躇なしに調整されねばならない。この必要の前では、哲學説も感傷的な先入觀も影を潜ますべきである。要するに文明の最高目的は人間の人格の發展である。

一三

人間の宇宙

人間が復興し、その生理活動と精神活動とが全き調和を得たなら、宇宙それ自體も一變するであらう。なせなら宇宙は、吾々の身體の状態次第でそれ自らの形貌を變へるからである。宇宙とは只吾々に知れてゐない、多分又永久に知りやうのない一つの外側の實在に對して吾々の神經系統と感覺器官と科學的技術との與へる應答に外ならないといふ事を忘

れてはならない。吾々は又、この事と共に次の諸點をも忘れてはならないのである。即ち、吾々の凡ゆる意識状態、吾々の凡ゆる夢想、數學者のそれも戀人のそれも、悉くが一樣に眞實である事を。日没は物理學者にとつて電磁波の現象と見られ、畫家には絶美な色の交錯として見られるが、いづれも優劣のない客觀的事實である。それ等の色によつて惹起された美的感情と、それ等を構成してゐる電磁波の長さの測定とは吾々自身の二様の活動で、同じ存在の權利を有するものである。喜びも悲しみも、遊星や太陽と同等に重要な存在である。しかし、ダンテやエマソンやベルグソンや、又はヘイルの世界が、ミスタ・バツピット（米人シンクレアの小説に出てゐる普通の市民）のそれよりか一層廣大なのは明かである。宇宙の偉大さは、吾々の心身の活動が強さを増すにつれて必然的に増大する。

吾々は人間を、物理學者や天文學者やの天才が作つた宇宙から、ルネッサンス以來閉ぢこめられてゐた宇宙から解放せねばならない。物質の世界は、美しくもあり壯大でもあるが、人間にとつては狭すぎるのである。同様に吾々の經濟的・社會的環境も吾々の寸法には合はない。吾々はこの物質のみが實在すると云ふ學説を信じることが出来ない。吾々はむしろ、吾々の全部がその中に入りこんでゐるのでなく、吾々は物界の連續といふ「擴がり」よりもつと別の「擴がり」にまで自らを延長させるものであることを知つてゐる。人間は物質性のものであれば、生き物でもあり、凡ゆる精神活動の中心でもある。星と

星との間の、無限の死の空間にも人間の有るか及び及んでゐると云ふことは全然問題外に
おいてもいゝ。しかし、人間は決してこの廣大無邊な物質の世界に於ける一外人ではな
い。その精神は、數學的な抽象物に依つて容易にそこを縦横に馳せまはるのである。しか
し、人間はごちらかと云ふと地球の表面を愛好し、山や河や海を見る方を好み、樹や草や
動物のやうに造られてゐる。人間は彼等の友達である事を好む。又、美術品や記念碑や、
近代社會の機械的驚異や、親友や愛する者から出來てゐる小さなグループへ一層の愛着を
寄せてゐる。さうかと思ふと又、空間と時間との彼方の、別の世界に自らを延ばすことも
する。そして實に、この世界——彼自身であるこの世界から出て、さうしようと思ふさへ
すれば、無限の他の世界を駆けめぐることなし得る。學者や藝術家や詩人の觀照する美
の世界、犠牲と英雄的行動と自己棄却への感激を與へる愛の世界、熱心に凡ゆる事物の本
原を尋ね求めた者への最高報酬である恩寵の世界、吾々の宇宙とは斯くの如きものである。

一四

人間の再建

今こそ人間革新の大業に着手すべき時である。しかし、吾々は次第書プログラムの作成をしないで
あらう。なせなら、豫定の計劃書なるものは、生きた實在を窮屈な鐵の鎧の中へ押込めて

窒息させるからである。プログラムは豫想出来ないものの出現をさまたげ、未來を吾々の精神の限界内へ固定せしめる。

吾々は奮起し前進しなければならない。吾々を盲目的な機械主義・技術主義から解放させねばならない。吾々の凡ゆる潜んだ能力のその複雑さと豊富さを十分に實現せしめねばならない。生命に關する諸科學は、吾々の目的が何であるかを指示し、それに達すべきための手段を吾々の手中へ握らせてゐる。しかし吾々はまだ、無生物質の諸科學が、吾々の本質に關する法則を無視して建てた世界の中に陥りこんでゐる。その世界は吾々の居るべき世界でない。なせなら、それは吾々の理性のあやまりから生れたものであり。吾々自身の無知から出たものである。かくの如き世界へ吾々を適應させることは吾々の爲し得る所でない。随つて吾々はこの世界に對して叛逆するだらう。その價値を變更させるだらう。そして、それを吾々に適當なものとして整頓し、秩序立てるであらう。いまや科學は、吾々をして、自分の中に潜んでゐる總ての潜在能力を發展せしめ得るのである。吾々は心身の活動についての祕密な機構を知り、吾々の弱さが何處から來るかを知つて居り、如何に吾々が自然の法則を破つて來たかを知つて居り、なせ罰せられてゐるか、なぜ暗闇の中をさまよひ歩いてゐるかを知つて居る。しかも又、吾々は同時に、黎明の狹霧を通じて救ひへようを見出しかけてゐる。

有史以來こゝに初めて、一つの文明が、没落の第一歩に突つかかりながら、自らの害悪が何事に原因してゐるかを識り得たのである。それは多分、この知識を利用し、科學の驚くべき偉力に助けられて、過去の凡ゆる大民族に共通の悲慘な運命を避け得るであらう。新らしい道へ！ 吾々は直ぐに、今から、發足せねばならない。

昭和十三年七月三十日
昭和十三年八月十五日
昭和十三年九月十一日
印刷發行
第二版

人 間
參 閱
金 價 定

著 者

滋賀縣大津市神出真町平一番地
櫻 澤 如 一

發行者

京都市柳馬場三條下ル
奧 井 金 治 郎

印刷人

京都市伏見區樹形町巽番地
福 本 久 造

印刷所

京都市伏見區樹形町巽番地
文 明 舍 印 刷 所

發行所

滋賀縣大津市神出真町平一番地
無 双 原 理 講 究 所

配給所

東京市神田區淡路町二丁目九番
日本出版配給株式會社

版 權
所 有

櫻澤如一著作目録

フランス語

東洋哲學及び科學の根本無双原理……………三・五〇_定
 哲學及び科學の限界に從つて切斷せる世界の斷面……………三・五〇
 分光學と東洋哲學……………(非賣品)
 摩訶般若波羅密多心經……………三・五〇
 東洋醫學……………五・〇〇
 花の異鈔……………七・〇〇
 嘆異鈔……………三・五〇

ドイツ語

東洋は語る……………(近刊)
 花の本……………(近刊)

邦文

哲學・醫學・食物
 根本無双原理「易」……………一・〇〇
 身土不二の原則……………〇・二〇
 厚生省の指導原理としての根本無双原理……………〇・二〇
 南北相法修身抄……………〇・二〇
 最後に來るもの……………〇・二〇

自然醫學としての神道……………一・二〇
 魔法の眼鏡……………二・〇〇
 無双原理の研究叢書(十二篇ノ内)
 第一篇 宇宙の秩序……………〇・三〇
 第二篇 ふしぎな世界……………〇・三〇
 第三篇 人間の秩序……………〇・三〇
 第四篇 うさぎのピピ……………〇・三〇
 第五篇 一つの報告……………〇・三〇
 第六篇 わが生命線爆破さる……………〇・三〇
 レヴィ・ブリエール原著
 原始民族の心理・宗教・思想……………(未刊)

×

日本精神の生理學……………〇・八〇
 食養講義録……………〇・八〇
 食養學序論……………二〇〇〇
 食養料理法上下……………二〇〇〇
 食養療法……………二〇〇〇
 健康と幸福……………〇・八八
 アランデイ博士原著
 西洋醫學の新傾向……………一・八〇
 西洋醫學の没落……………(絶版)
 家庭食療讀本……………〇・七〇
 食養戰線……………〇・八〇

健康戦線の第一線に立ちて……………〇・六〇

文學

石塚左玄―(東洋醫學の曉星)……………一・八〇
 日本詩集……………一・五〇
 ローデンバック詩集……………一・〇〇
 ボードレール詩集……………一・〇〇
 悪の華……………〇・五〇
 シニツラア……………〇・五〇
 クリスマスの買物……………〇・五〇
 やしなひ草……………〇・五〇
 わが遺書……………〇・三〇

政治・社會

空襲讀本……………(賣切)
 S・N 西洋社會(第五十四冊まで)……………(非賣品)
 内部構造研究……………(非賣品)
 白色人種を敵として……………〇・八〇
 猶太財閥の世界分布とその動向……………〇・二〇
 對日全世界戦争(世界百科要覽)……………一〇〇〇
 とユダヤ財閥(時局解説中)……………一〇〇〇
 ユダヤ人の世界陰謀網を衝く……………〇・二〇
 支那事變とユダヤ人の暗躍……………(賣切)

雜

落ちない飛行機「空の嵐」日本名「雲雀」―ブウ・デュ・シネルの作り方と飛行機獨習法……………(未刊)
 小型活動寫眞撮影法……………三・五〇

正しい食物について……………〇・二〇
 肺結核の食物療法……………〇・二〇
 食箋料理の作り方……………〇・二〇
 著膿の食物療法……………〇・二〇
 食養生讀本……………〇・八〇
 カレル博士原著・文部省推薦
 人間―間―(この未知なるもの)……………三・〇〇
 自然醫學―(食物療法總覽)……………四・二〇
 新食養療法……………一・五〇
 食物療法道しるべ……………〇・四〇
 病氣の癒る食物……………一・五〇
 米の知識とたき方たへ方……………〇・八〇
 砂糖の害と肉食の害……………〇・六〇
 戦争に勝つ食物……………一・三〇
 人間の榮養學及び醫學……………一・六〇
 満洲食養讀本……………〇・六五
 満洲國の厚生運動……………〇・四〇
 おやつ作り方……………〇・三〇
 食物の倫理……………一・六〇
 健康の六大條件―(行の食養)……………一・六〇
 健康學園……………一・八〇
 無双原理講究所通信
 1. 食糧問題解決への道(讀賣新聞)……………〇・一〇
 2. 「國民體位低下の(中外日報)……………〇・一〇
 根本原因」を衝く……………〇・一〇
 3. 焦眉の食糧政策建直し……………〇・一〇
 4. 同志に告ぐ……………〇・一〇
 健康手帖……………〇・五〇

2E 77

日本を亡ぼすものはだれだ!!

■世界各民族の悲惨なる死闘!姿なき殺人魔の猛爆を熟視せよ!

■乳幼児殆亡六十萬!精神薄弱二十萬!

■あゝ日本を亡すものは誰だ!それを知らんとするものは

「健康戦線の第一線に立ちて」をよめ!

■これは殺人魔撃退の爆弾だ!これを十萬數打てば日本を亡ぼす

殺人魔撃退されるのだ!

發賣!忽ち一萬五千發賣切!増刷又増刷!

だが敵は頑強だ!打て!十萬發!又二十萬發!

日本を守る爆弾はこれだ!

終